



Title	フランツ・シュテットナー博士作成ガラススライドの意義について：京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵資料を中心に
Author(s)	和田, 積希
Citation	デザイン理論. 2016, 68, p. 63-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57984
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランツ・シュテットナー博士作成ガラススライドの 意義について

— 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵資料を中心に

和田 積 希

キーワード

ガラススライド, フランツ・シュテットナー, 京都高等工芸学校, 浅井忠
glass slide, Franz Stoedtner, Kyoto Koto Kogei Gakko, Chu Asai

はじめに

- 第1章 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のガラススライド
- 第2章 フランツ・シュテットナー博士とガラススライド
 - 第1節 フランツ・シュテットナー博士と学術用映写研究所
 - 第2節 ガラススライドの作成と販売カタログ
 - 第3節 ガラススライドの流通
- 第3章 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のガラススライドの概要とその意義

おわりに

はじめに

京都工芸繊維大学美術工芸資料館（以下、資料館）には、現在約1,800枚のガラス製のスライドが収蔵されている（図1）。そのほとんどが同大学前身校のひとつである京都高等工芸学校が設立された1902（明治35）年から1920年代にかけて、同校の視覚教材として購入されたものである。このうち約1,000枚が、1895年にフランツ・シュテットナー博士（Dr. Franz Stoedtner, 1870-1944/46, 以下、シュテットナー）によってドイツのベルリンに設立された「学術用映写研究所（Institut für wissenschaftliche Projection）」¹の製品であり、今回とりあげる資料である。

なお、資料の名称としては「幻燈画」「幻燈写真画」「幻燈種板」「幻燈影画」などがあるが、本稿では、便宜上「ガラススライド」という名称で統一する。

シュテットナーは、ドイツで初めて学術的な利用を目的としたガラススライドの作成・販売を手がけた人



図1 ガラススライド（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN.2171）

本稿は第57回大会（2015年7月25日、於：武庫川女子大学）での発表に基づく

物の一人である²。彼の作成したガラススライドのシリーズは、その販売カタログとともにドイツ国内をはじめ、アメリカやヨーロッパの大学にも収蔵されている。おそらく同校同様に当時大学の教材として購入されたものが、そのままアーカイブとして図書館や美術館に保存されているのではないかと考えられる。

資料館所蔵のシリーズには、ヨーロッパの古代建築物から絵画、近代の工芸品や室内装飾など、貴重な美術・デザイン資料が写っており、京都高等工芸学校の図案科において、実物にかわる参考資料として利用されていたと考えられる。同校では陶器やポスターなど当時のヨーロッパの最先端のデザイン・技術を取り入れた実物資料を、開校初期の段階で、多く入手しており、ガラススライドもこうした知の受容のひとつの手段として利用されていたと考えられる。

本稿では、まず資料館所蔵のガラススライドの概要とシュテットナーの業績を簡単に紹介し、その後ガラススライドの販売と京都高等工芸学校における購入について、販売カタログを手がかりに分析し、最後に明治期の高等教育の現場におけるガラススライドの意義を考察する。

第1章 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のガラススライド

資料館所蔵のガラススライド（表1）は、当初附属図書館の資料として登録され、一部をのぞき、京都高等工芸学校時代につくられたとみられる木箱に入れて保管されてきた。1981年の資料館開館にあたり、順次収蔵資料として登録されたが、一部は登録後に破損や劣化を理由に廃棄処分扱いとなり、残りについても、一部をのぞき、廃棄寸前の扱いで放置されていた。

表1 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵のガラススライド

資料名	作者名	製作国	員数	受入年月日	受入	藏品番号
幻燈画	Franz Stuedtner	ドイツ	100	1902.09.23	購入	AN.0690
幻燈写真画 -1900年パリ万国博覧会場 情景	E. Mazo	フランス	67	1905.12.07	購入	AN.1010
幻燈影画 -パリおよびパリ郊外風景	E. Mazo	フランス	20	1906.03.23	購入	AN.1012
幻燈映画-台湾風情	不詳	不詳	70	1906.05.04	購入	AN.1013
幻燈種板 ヨーロッパ美術 史写真	Franz Stuedtner	ドイツ	622	1911.05.04	購入	AN.2171
幻燈種板 ヨーロッパ美術 史写真	Franz Stuedtner	ドイツ	309	1912.07.22	購入	AN.2179
幻燈種板 毛糸紡績用譜器 械ほか	A. Pichlers Witwe & Sohn	オースト リア	354	1913.06.13	購入	AN.2223 ~AN.2237
幻燈種板 建築工芸写真板	不詳	不詳	208	1914.09.01	購入	AN.2239
幻燈種板、染色各種機械	Mather & Platt Ltd.	イギリス	70	1922.06.20	寄贈	AN.0095
建築物震災幻燈映画	不詳	日本	100	1923.12.01	購入	AN.2247

最近おこなった調査で、カビが発生していることがわかり、現在は一枚ずつ応急的なクリーニングを施して、中性紙に包み、文書箱に入れて、温度・湿度管理のされた収蔵庫内で保管をしている。

これらのガラススライドについて資料館の蔵品目録には、附属図書館時代からの簡単な情報しか記載されていないが、購入／受贈年月日、購入／受贈元、購入金額あるいは当時の評価額などは明記されている。もっとも古いものはシュテットナーが作成した「幻燈画」(AN. 690)として登録されている100枚セットで、1902年9月23日に京都高等工芸学校の初代校長、中澤岩太(1858-1943)が受入先となり購入したものである。同校は1902年9月3日に開校しているため、これは最初期の教材であったとわかる。

なお、このシュテットナーのシリーズについては、「幻燈種板 ヨーロッパ美術史写真」という名称で1911年に622枚(AN. 2171)を、1912年に309枚(AN. 2179)を追加購入している。また、映写用のドイツ製幻燈器械も1台収蔵している(図2)。



図2 幻燈器械(京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN. 2172)

第2章 フランツ・シュテットナー博士とガラススライド

第1節 フランツ・シュテットナー博士と学術用映写研究所

シュテットナーは1870年にベルリンで生まれ、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学(現在のフンボルト大学ベルリン)に進学し、同大学の美術史教授であったヘルマン・グリム(1828-1901)の指導を受け、1895年にハンス・ホルバインについての研究で博士号を取得した³。

ヘルマン・グリムは、ドイツにおけるガラススライドの映写技術の発展や利用促進に寄与した重要な人物である。彼は1873年から1901年まで同大学の美術史教授であったが、この大学に赴任する以前より美術作品の複製媒体として写真がいかに有効的であるかを主張し、自身の講義においても積極的に写真を利用した⁴。こうした影響を間近で受けたシュテットナーが、期待に応えるかたちでベルリンに設立したのが「学術用映写研究所」であった。ドイツでは、1890年代には美術品や建築物の複製写真が普及していたと思われるが、美術愛好家を対象とした名品の写真が多く、教育機関には、美術史の研究や講義に利用できる多様で専門的なスライドを求める声があった。シュテットナーは研究が完了したのち、大衆教育のため、ベルリンの学校や啓蒙センターをはじめとして、全国で自ら製作したガラススライドを用いて、美術史の講演をおこなった。この講演を聞いた大学の美術史学の教員たちが、彼の作成したガラスス

ライドというすぐれた教材に注目し、注文をするようになったと1940年に発行された『ドイツのスライド製作45年：フランツ・シュテットナー生誕70年（45 Jahre deutsche Lichtbildarbeit: zum 70. Geburtstag Franz Stoedtner's）』という本で述べられている。

研究所は、当初どこに設立されたのか定かではないものの、1898年の段階では、Berlin NW. 21, Bremer Strasse 56を住所としており、その後1908年の段階では、Universitätsstrasse 3bに移転をしている。この時期は、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学とは、目と鼻の先にあったと思われ、両者の密接なかかわりを示している。

自身がカメラマンでもあったシュテットナーは、おそらくすでにあつたネガからガラススライドを作成する一方で、1900年以降、ドイツを中心にヨーロッパやアフリカ、東南アジアなどへ大規模な撮影旅行に出かけてネガの収集をおこない、スライドの充実に力を注いだ。その数は、最初期の販売カタログが出版された1898年時点では10,000枚ほどであったが、1944年の段階では、ネガにして約25万枚におよんでいる。まず、彼が力を入れたのはドイツにおける文化財の把握であった⁵。有名なものはもちろん、当時あまり知られていなかった美術・工芸作品や建築物を撮影して、様々なシリーズを作成し、カタログをつうじて教育・研究機関を中心に販売をおこなっていたと考えられる。やがてその領域は、物理学、天文学、地質学、機械工学、電子工学といった文化史以外の分野にまで及んでいく。

現在、シュテットナーの残した約20万枚のガラス製ネガと多くの見本アルバムは、フィリップス大学マールブルク（Philipps-Universität Marburg）のドイツ美術史ドキュメンテーションセンター（Deutsches Dokumentationszentrum für Kunstgeschichte）のビルトアルヒーフ・フォト・マールブルク（Bildarchiv Foto Marburg）が保存をしている。また、2006年以降には、技術史、物理学、天文学、機械工学、電子工学、地理学、地質学の分野から約20,000枚のガラス製ネガがまとめてドレスデンのドイツ・フォトテーク（Deutsche Fotothek）にわたり、一部がネット上で公開されている⁶。

第2節 ガラススライドの作成と販売カタログ

つぎに、ガラススライドの作成、販売の実態についてみていきたい。

まず、各ガラススライドには、印字されたラベル（図3）と手書きのラベル（図4）の2枚が両脇に貼られている。印字ラベルには、研究所名と住所、発行の時期によっては研究所の



図3 印字されたラベル

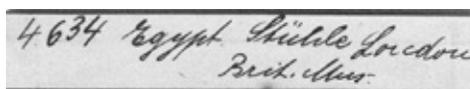


図4 手書きされたラベル

マークが記載されている。資料館所蔵のガラススライドを調べたところ、ラベルは6種類あり、住所も微妙に異なっており、どの時期の販売かある程度は特定することができる(表2)。

一方、手書きのラベルには、被写体の作品名とともに、作者や時代、場所、素材、所蔵先などが書かれている。ただし記載内容の種類はラベルによって異なっている。もっとも重要なのは、左上の1ケタから5ケタにわたる番号であり、おそらくこれは、研究所が管理する各ガラススライド固有の番号であったと推測される。同研究所はある時期からガラススライドの種類や値段を記したカタログを発行し、それを通じてガラススライドの販売をおこなっていた。このラベルの番号は、カタログに載せられている番号と一致する。ちなみに、資料館所蔵のガラススライドのうち一番小さい番号が7番で、一番大きな番号が54282番であり、少なくとも1912年の時点で、この研究所がすでに54,282枚のガラススライドもしくはその素材となるネガを保有していたことが推測できる。

ではつぎに、この販売カタログについて見ていきたい。最初のカatalogが発行されたのは、おそらく同研究所が設立されて4年目となる1898年のことであった。現在、筆者が把握できているカタログのうち、設立当初から資料館所蔵のスライドが最後に購入された1912年頃までに出版されていたものには、おもに表3のようなものがある。これらは、実物が確認できていないものもあるため、発行年・発行順は明確ではない。また、これら以外に発行されていたカタログも多数あったと思われる。もちろん1912年以降も多くのカタログが発行されている。なお、資料館にはカタログは収蔵されていない。

表2 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵ガラススライドの印字ラベル

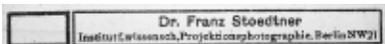
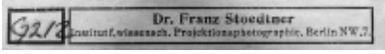
1	Dr. Franz Stoedtner Institut f. wissenschaftl. Projektionsphotographie. Berlin NW.21		AN. 690 のほとんど
2	Dr. Franz Stoedtner Institut f. wissenschaftl. Projektionsphotographie. Berlin NW21		AN. 690 の一部
3	DR. F. STOEDTNER, BERLIN NW.7 Institut f. wissenschaftl. Projektionsphotogr.		AN. 2171 のほとんど
4	Dr. Franz Stoedtner <i>Institut f. wissenschaftl. Projektionsphotographie, Berlin NW.7</i>		AN. 2171 の一部
5	Dr. Franz. Stoedtner Institut f. wissenschaftl. Projektionsphotographie. Berlin NW. 7		AN. 2171 の一部
6	<i>Verlag Dr. Franz Stoedtner Berlin NW7 Wissenschaftliche Projektion und Stereoskopie</i>		AN. 2179 のほとんど

表3 設立当初から1912年頃までに出版されたおもなカタログ

カタログ名 (原文)	カタログ名 (和文)	発行年
Die Antike Kunst in Lichtbildern	ガラススライドでみる古代美術	c.1898
Katalog von Lichtbildern über Kunstgewerbe und Dekoration	工芸と装飾についてのガラススライドカタログ	1898
Marine-Lichtbilder nach den neuesten Aufnahmen	最新の撮影でみる海軍のスライド	c.1898
Projektionsapparate Mit vielen Neuheiten	幻灯装置 最新作多数	c.1898
Katalog von Lichtbildern über Italienische Kunstgeschichte	イタリア美術史についてのガラススライドカタログ	1900
Die Antike Kunst in Lichtbildern II. Auflage	ガラススライドにみる古代美術 第2版	1903
Deutsche Städte-Bilder No. 1~6	ドイツの街の風景 No. 1~6	1903
Künstler-Kataloge I. Albrecht Dürer	芸術家のカタログ I. アルブレヒト・デューラー	1903
Künstler-Kataloge II. Rembrandt	芸術家のカタログ II. レンブラント	1903
Künstler-Kataloge III. Arnold Böcklin	芸術家のカタログ III. アーノルド・ベックリン	1903
Deutsche Kunst in Lichtbildern	ガラススライドでみるドイツ美術	1908
Niederländische Kunst in Lichtbildern	ガラススライドでみるオランダ美術	1912

さて、このなかで最初に発行されたのが、おそらく1898年頃に発行された『ガラススライドでみる古代美術 (Die Antike Kunst in Lichtbildern)』⁷である。まず、エジプト、ギリシャ・ローマといった古代美術を基本にしていることがわかる。また、同年には工芸と装飾に関するスライドのカタログや1900年にはイタリア美術に特化したカタログも発行されている。

カタログの構成を紹介するため1898年出版の『工芸と装飾についてのガラススライドカタログ (Katalog von Lichtbildern über Kunstgewerbe und Dekoration)』⁸をとりあげたい。

このカタログには「王立工芸博物館付属図書館長ペーター・イエッセン博士の選出にもとづく教育用模範作例集 (darin eine Mustersammlung für Unterrichtszwecke nach Auswahl von Dr. P. Jessen, Direktor der Bibliothek des Kgl. Kunstgewerbe-Museums zu Berlin)」という副題がついている。

まず、1ページ目にシュテットナーによる1898年7月31日付の序文が載っている。ここで彼は、作成したガラススライドのコレクションが約10,000枚に増加しており、そのなかから工芸に該当するものを選び、小さな選抜集のカタログを出版したことを述べている。カタログにはあらゆる時代の様々な様式の工芸および、装飾美術に関係する特徴的な作品が含まれていること、ガラススライドの整理にあたって、ベルリンの工芸博物館付属図書館にある写真コレクションを手本にしたことが述べられている。また、工芸博物館付属図書館長ペーター・イエッ

セン博士の好意的な支援により、同館のコレクションを自由に利用できたこと、作品の配列にあたり館長自身による模範作例集の選抜をおこなってもらったことが述べられている。また次ページには、この模範作例集の解説が載っており、装飾や工芸について講義をする際に図の上映がいかに有効であるかを述べている。

つぎに、目次と標題を見ていきたい。まず第一項目として、装飾 (Ornamente)、建物部分 (Bauteil)、室内装飾 (Innerräume (Dekoration))、家具と象牙細工 (Möbel und Elfenbeinarbeiten) などの大枠となるジャンル、つぎに、ジャンルによっては部分や素材、さらにおおよそ古代から中世、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロック、ロココ、ツォープなどの時代、最後に国や地域で区分されている。ヨーロッパのものが圧倒的に多く、アラビアやインド、ごく数点であるが日本もあがっている。

工芸品の選抜集として、全体を網羅できるように様々なジャンル、時代、地域のものが集められ、様式史をまなぶ教材としての利用も想定されていたと考えられる。ヨーロッパ、特にイタリアやドイツのものが多くは、シュテットナー自身また当時のドイツ人の関心や評価が、やはりそこにあったということ、とくにドイツについては、彼自身がドイツの文化財の保護に力をいれていたことが背景にあると思われる。また現実問題として、ヨーロッパ以外でのネガの収集がこの時点では難しかったこともひとつの要因であるだろう。

つぎに、ガラススライドの販売の実態についてカタログの記載内容をもとに紹介したい。ガラススライドの標準フォーマットは、『工芸と装飾についてのガラススライドカタログ』によれば、ガラスのサイズが8.5×10cm、図版のサイズが約7.5cmとなっている。値段は1枚0.85マルクである。前述のとおり、各スライドには番号がふられており、注文の際はこの番号を告げればよい。番号には*印がついたものがあり、おそらくこれが模範作例集に選ばれたスライドであろう。模範作例集は、全部で525枚あり、セットで購入すると本来なら446.25マルクのところを400マルクで購入できるようになっている。支払い期日は1か月、50マルクまでの送金の場合、郵送料の割引がないとされている。また当初は、スライドの貸出もおこなわれており、1枚につき20ペニヒ、最低25枚を借りることが条件で、貸出期間は輸送期間もふくめて1週間、それ以上の場合は1枚につき10ペニヒの追加料金がかかると書かれている。また、例外的に紙焼きもおこなわれていたようである。梱包料や郵送料は注文者の負担となっている。さらに新作のスライドは、1枚1.20マルクとなっていて、ネガがコレクションに加わるまでは、1.50マルクかかるとされている。また、カラースライドの販売もあり、1枚3マルクになっている。以上は、取引にかかわる注意事項として、目次の次ページに掲載されている。また『ガラススライドのなかの古代美術』の広告も載っており、このカタログの取り寄せに50ペニヒがかかることがわかる。

実際にカタログのなかをみていくと（図5）、多くの番号がさきほどの分類にそって並んでいるが、1から順番に並んでいるわけではない。おそらくガラススライドあるいはネガの作成時にそれぞれ固有の番号がふられ、カタログの作成時には全体のコレクションのなかから、その都度カタログの内容に応じたスライドが選ばれて、掲載されたせいであろうと考えられる。この『工芸と装飾についてのガラススライドカタログ』には、最少で1番と最大で6953番の番号がみられるが、全体としては2,234点しか載っていない。またそのうち7点が違う観点からの分類で重複して掲載されているため、実際掲載されているガラススライドの種類としては2,228点である。序文で述べられていたように約10,000点のコレクションのなかから、2,228点の工芸、装飾に関わるガラススライドを選び掲載したと考えられる。

ちなみに図5には、*4634という番号のガラススライドの情報が載っている。内容は、「4 Stühle. London, British Mus.」であり、4脚のスツール、ロンドン、大英博物館を意味している。この番号に該当するのが図1のガラススライドということになる。

つぎに、1900年に発行されたイタリア美術史に関するカタログ『Katalog von Lichtbildern über Italienische Kunstgeschichte』⁹を見ておきたい。このカタログでは、大学、工業大学、高等専門学校、ギムナジウム、美術工芸学校の授業のための必須の視覚教材として、スライドの重要性をアピールするとともに、コレクションを歴史的区分で分類し、イタリアの名匠の代表的作品を一目瞭然に見ることのできるハンドブックの提供を目指したということが、序論で述べられている。実際に、カタログは建築・彫刻・絵画の3つに分かれており、それぞれがさらに時代、流派、作家、作品ごとに並べられている。また巻末には、アルファベット順で記した場所索引と、作家索引が添付されている。

取引方法については1898年のカタログとほぼ同様であるが、注文時の注意として大量注文をおこなう場合は、カタログ中の番号に赤いラインをひき、カタログごと送るように指示がされており、大量注文を受けることが増えていたことを示している。ガラススライドのサイズや価格、支払い期日などは基本的に変わっておらず、新規掲示されているガラススライドについてはその都度調達して送付されるため、1枚1.20マルクかかることなども同様である。このことから、一定の在庫以上の新調品については、まずは広告を出し、注文を受けてからガラススライドを作成する無駄のないスタイルをとっていたと推測できる。

あらたな情報としては、グリマースライドとよばれる雲母製のスライドが発売されているこ



図5 『工芸と装飾についてのガラススライドカタログ』 p. 38 一部 (Staatsbibliothek zu Berlin 蔵)

とである。落としても当たっても割れない素材で、ガラススライドが1枚約50gなのに対し、グリマースライドは1枚5gしかないことが宣伝されており、出張講演での利用に不可欠、と書かれている。これは1枚1.75マルクで販売されている。さらにスライドの貸出が、原則中止となっていることがわかる。また、スライドの納品については、通常は5～6日かかり、100枚ほどになると8～10日、新調品になるともう2～3日よけいにかかること、カラースライドの新作はさらに時間が欲しいことなどが書かれている。また、各ゼミナールの始まる4月、10月は混み合うせい、早めの注文を求めており、開業から5年ほどたち、繁忙期には大学を中心とした教育機関からの注文が殺到していたことをうかがわせる。またスライドの発送については、商品用箱に入れて発送されるが、梱包と郵送料は注文者負担になること、新規の個人向け発送については、苗字宛になることが示されている。この文面上では、ベルリンが発送の対象地区となっているようである。さらにこのカタログには、広報ページがあり、コレクションの現在庫量は約16,000枚におよび、毎年約4,000枚が追加されていることなどが書かれている。

第3節 ガラススライドの流通

最後に、こうしたシュテットナーのガラススライドの流通について、考えてみたい。この研究所の設立の趣旨と販売カタログの充実度、このカタログが現在ドイツの各地の大学の図書館に収蔵されていることを考えると、彼は当時ドイツ国内では少なくともこの分野における第一人者であったと推測される。前述した1940年発行の『ドイツのガラススライド製作45年：フランク・シュテットナー生誕70年』には、その時点で100万点以上の図版が海外へ輸出されており、外国の教員がドイツへの出張や旅行の際に研究所を訪れ、講義の為の図版をまとめて購入することがよくあったと記されている。

同シリーズのガラススライドは現在、ドイツ国内の大学はもちろんのこと、アメリカのハーバード大学やイェール大学、スペインのマドリード・コンプルテンセ大学などの図書館やスイスのザンクト・ガレン公立図書館などが資料として収蔵していることがわかっている。ドイツのフンボルト大学ベルリンをはじめとして、同時代に、研究や教育の資料として購入され、今日まで保管されてきた可能性は高い。また、販売カタログについては、ドイツや欧米だけでなく台湾大学の図書館などにも入っており、どの時期に収蔵されたかを確認する必要はあるものの、世界的に宣伝がおこなわれていたことがうかがえる。

第3章 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のガラススライドの概要とその意義

ではつぎに、資料館が所蔵しているシュテットナーのガラススライドについて紹介し、その

傾向と意義について考えてみたい。

最初に述べたように、同シリーズは1902年、1911年、1912年と計3回にわたって購入されている。一番重要なのが、開校当初に中澤岩太を通じて購入したAN. 690のガラススライド100枚である(図6~8)。この内容をみていくと、ドイツを中心に、その地域はフランス、イタリア、オランダ、スペイン、オーストリア、ギリシャ、ローマと多方面にわたり、時代も古代から中世、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロック、ロココと幅広い。ジャンルも、ラファエロやデューラーの絵画をはじめ、皿、花瓶といった陶器類やガラス器、それも古代ローマのものからマジョリカ焼、マイセンまで様々なものがあり、ゴブラン織などの織物類も含まれている。特に目を惹くのは建築装飾で、円柱や屋根、レリーフなどの壁面装飾、出版物から撮影したと思われる平面図なども含まれている。建物全体を写したものはあまりなく、細部装飾に焦点がむけられている。また100点のうち20点あまりは、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(1863-1957)やヴィクトール・オルタ(1861-1947)など同時代に流行した建築家やデザイナーの作品のガラススライドである。椅子や机、戸棚、ベッド、階段、室内装飾全体を写したのものや、燭台や時計などのインテリア類、コーヒーセットやルネ・ラリックの装身具、壁画や装飾図案も含まれている。全体として、様々なジャンル、時代のものを取り入れているが、やはり細部装飾と同時代のデザイン潮流に注目をしていて印象を受ける。このことは、これらのスライドの目的が図案科におけるデザインの参考資料であったことをうかがわせる。京都高等工芸学校では、トゥールーズ=ロートレックやシェレ、ウィーンのゼツェッションなどのポスター、フランスのエミルミュラーやハンガリーのジョルナイ、ドイツのマイセンなどの陶器類をはじめ、開校当初に実に多くの実物資料が教材として用意された。ガラススライドは、実物の補助資料としての役割をはたしていたと思われる。

一方、「ヨーロッパ美術史写真」と題されている1911年購入のAN. 2171と1912年購入のAN. 2179のガラススライドは、また少し性格が異なっている。まずAN. 2171のガラススライドは、購入後に京都高等工芸学校でつけられたとみられるA, E, G, Rの4つのアルファベッ



図6 AN. 690 1-1 プレート2枚とポット2個 ドイツ 17世紀 銀製



図7 AN. 690 1-8 ベルベットの金襴 ス페인 16世紀 ベルリン美術館

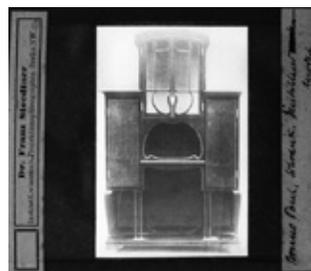


図8 AN. 690 5-1 ブルノー・バウル戸棚

トではじまる番号が、各スライドのラベルに赤字で記されている（図9～12）。中身を確認してみるとそれぞれ、Aはおそらくアッシリアなどのペルシャ地域、Eはエジプト、Gはギリシャ、Rはローマを示していることがわかる。エジプトのピラミッドやギリシャのパルテノン神殿、ローマのコロッセオ、ポンペイの壁画など、すべてがそうではないが、古代に特化して有名な美術作品や建築物を集めた印象を受ける。これらはまさにヨーロッパ美術史写真であり、図案教育の参考資料としてはもちろん、知識としてヨーロッパ美術の様式史をまなぶための教材であったと考えられる。全体として建築物の写真が多いのは、1911年頃の京都高等工芸学校の図案教育の中心が、浅井忠（1856-1907）の死去によって、建築家の武田五一（1872-1938）や本野精吾（1882-1944）へ移行していたことが影響していると思われる。

一方、AN.2179のガラススライド（図13）には、記号はふられていないが、やはり建築物の装飾が多く、全体を写したものと同時に、レリーフやパネル、柱装飾など細部による写真が多く見られる。また、図面も多い。教会や宮殿など中世以降の建物・作品が多いのも特徴である。AN.2171で足りないと思われた分野のガラススライドが購入されたようである。

なお、以上3件のうち、AN.690のガラススライドだけが販売時のものと思われる紙製の箱（図14）に入って収蔵されており、AN.2171とAN.2179のガラススライドについては、前述したような京都高等工芸学校の焼き印の入った木箱におさめられていた（図15）。

また、AN.2171とAN.2179のガラススライドのラベルには、前述した固有の番号が書かれているが、じつはAN.690のガラススライドには、この番号が記載されていない。AN.2171とAN.2179については購入した際の業者がわかっているが、AN.690については、中澤岩太が受入先となっており、1902年と受入時期も早いため、研究所でのカタログ販売が軌道になる前に、現地で購入してきた可能性も考えられる。ただ、実際に中澤がドイツで購入したのか、現地で手にいれた人から譲り受けたのか、やはり輸入業者を通じて購入したのか、入手経路は特定できず、番号が記載されていない理由についても、よくわかっていない。

最後に、資料館の所蔵するガラススライドの意義について考えてみたい。

トーマス・ハウフェの著作『近代から現代までのデザイン史入門 1750-2000年』¹⁰の38ページには有名なヴィクトール・オルタの「タッセル邸における〈吹き抜けの階段〉」という



図9 AN.2171 A



図10 AN.2171 E

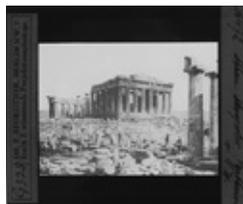


図11 AN.2171 G



図12 AN.2171 R



図13 AN.2179



図14 AN.690の外箱



図15 AN.2179の外箱

図版が掲載されている。この図版の出典は前述したビルトアルヒーフ・フォト・マールブルクとなっており、さらに資料館が所蔵している AN.690-5-9の画像（図16）と構図もぴったり合うため、同一のものと考えられる。少なくとも彼の名前において、1900年前後に撮影・販売された画像が、いまなお、デザイン史の視覚資料として使われているということは、彼のおこなった事業の重要性をものがたっている。

また 図17の画像は、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデが1899年にミュンヘンでおこなわれたゼツェッション展に出品した書斎を写したものであるが、デザイン史フォーラム編『国際デザイン史——日本の意匠と東西交流——』¹¹の79ページ図50と構図がきわめて似ている。図版の出典が載っておらず、全く別の経緯で撮影・保存されてきた写真の可能性もあるが、当時を知る写真として現在も利用価値があることは間違いない。

最後に紹介するのは、図18のオットー・エックマン（1865-1902）が描いた壁画を写したガラススライドである。水辺をイメージしたデザインで、下部に白鳥とヨットが、上の部分にはカエルとトンボ、花が描かれている。一方、図19は浅井忠が描いた図案帳の一部である。このヨットとカエル、トンボは、デザインが共通している印象を受ける。この AN.690のガラススライドが学校に入ったのは1902年のことであり、参考にしたにせよ、そうでないにせよ、開校当初の教材として浅井がこのカエルを見ていた可能性は高い。

資料館に残されている京都高等工芸学校図案科時代



図16 AN.690 5-9 ヴィクトール・オルタ 階段



図17 AN.690 5-7 アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ 書斎



図18 AN.690 6-2 (部分) オットー・エックマン 壁画



図19 浅井忠 図案帳 (部分) 個人蔵

に製作された生徒作品をみると、実物の写生やオリジナル作品の製作はもちろんのこと、当時ヨーロッパで発行されていた図案集を模写しているものもあり、あらゆるものが教材として機能していた。この約1,000枚のシュテットナーのガラススライドも、その内容からして、当時同校が目指していた新しい潮流の図案を創出する教育の格好の教材であったと思われる。印刷物と違い、ガラススライドは上映の際に細部を大きくすることができた。建築や工芸の装飾を考えるうえでたいへん使い勝手のよい教材であったに違いない。

ドイツやフランスなどヨーロッパに留学した経験をもつ同校の教授陣は、当然現地で流通し始めていた学術用のガラススライドの利用価値を認識していただろうし、日本国内においても1880年代以降、明治政府が先頭になって教育用のガラススライドの国内生産に着手し¹²、いよいよ教材としてガラススライドが普及していく時期であったと思われる。とくに浅井は、自身が絵を描く際にも風景を写真に撮って、あとでそれを参考にしながら描いたことがわかっており、写真の利用に抵抗がなかったように思われる。そうしたなかで、このシュテットナー作成のガラススライドは、数が豊富で時代やジャンルも幅広く、様式別に整理がなされていて選びやすく、なにより、まだまだ日本では手に入らないヨーロッパの美術品や建築物の写真が豊富に含まれていた。とくにアール・ヌーヴォーやユーゲント・シュティール、ウィーンのゼツェッションのようなヨーロッパにおける同時代の最先端のデザインをいち早く知る教材として、ガラススライドは非常にすぐれた素材であったと思われる。

おわりに

このように、シュテットナーのガラススライドは研究、教育に使用するというその目的から、現在でも使用可能な質の高い写真であり、またドイツの文化財をはじめとして、それまであまり撮影対象になってこなかった今となつては貴重な建物や作品、さらにはヨーロッパ以外の様々な地域における文化財を記録したものとして貴重であり、同時に教材としてきわめて価値の高いものである。

開校当初の京都高等工芸学校において、初代校長中澤岩太を中心とする教員陣は、こうしたスライド資料の研究・教育上の重要性と有効性を認識していたのであり、その選ばれたガラススライドは、当時の京都高等工芸学校がどのような教育をめざしていたかを読みとるうえで、きわめて重要な資料となる。

今後、シュテットナーの研究所の資料をさらに読みすすめるとともに、京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のガラススライドの内容についてもさらに調査をすすめ、ガラススライドが明治・大正時代の日本の高等教育機関における美術史やデザインの教育にどのように活用され、どのような効果をもたらしたのかについて、あきらかにしていきたいと考えている。

注

- 1 1895年にフランツ・シュテットナー博士が設立した研究所名は、1898年に同研究所が発行したカタログの表記に従えば、Institut für wissenschaftliche Projektionsphotographie であり、資料館所蔵のガラスライドのラベルには、その省略名が記されている。しかし、当該ライドをアーカイヴしているフィリップス大学マールブルクや、当該ライドについての先行研究 Haffner, Dorothee: "Die Kunstgeschichte ist ein technisches Fach." Bilder an der Wand, auf dem Schirm und im Netz には、Institut für wissenschaftliche Projection と表記されており、本稿も後者の表記にならう
- 2 <http://www.deutschefotothek.de/documents/kue/70129034> (2016年1月11日取得)
- 3 *45 Jahre deutsche Lichtbildarbeit : zum 70. Geburtstag Franz Stoedtners*, p. 6, Dr. Franz Stoedtner verlag, 1940
- 4 Haffner, Dorothee: "Die Kunstgeschichte ist ein technisches Fach." Bilder an der Wand, auf dem Schirm und im Netz., in Philine Helas, Maren Polte et al., *Bild/Geschichte. Festschrift für Horst Bredekamp*, pp. 119-129, Akademie Verlag GmbH, Berlin, 2007
前川修「複製の知覚 — スライド鑑賞の諸問題 —」京都哲学会編『哲学研究』570号, 2000
- 5 *45 Jahre deutsche Lichtbildarbeit : zum 70. Geburtstag Franz Stoedtners*, pp. 6-8, Dr. Franz Stoedtner verlag, 1940
- 6 <http://www.deutschefotothek.de/documents/kue/70129034> (2016年1月11日取得)
- 7 Stoedtner, Franz: *Die Antike Kunst in Lichtbildern, Zum Gebrauche in Schulen und Universitäten*, Berlin, Pass & Garleb, 1898
- 8 Stoedtner, Franz: *Katalog von Lichtbildern über Kunstgewerbe und Dekoration, darin eine Mustersammlung für Unterrichtszwecke nach Auswahl von Dr. P. Jessen, Direktor der Bibliothek des Kgl. Kunstgewerbe- Museums zu Berlin*, Berlin, Pass & Garleb, 1898
- 9 Stoedtner, Franz: *Katalog von Lichtbildern über Italienische Kunstgeschichte, Architektur, Skulptur und Malerei in Chronologischer Folge mit Ortsregister und Künstlerverzeichnis*, Berlin, Imberg & Lefson, 1900
- 10 トーマス・ハウフェ (藪亨訳)『近代から現代までのデザイン史入門 1750-2000年』晃洋書房, 2007
- 11 デザイン史フォーラム編『国際デザイン史 — 日本の意匠と東西交流 —』思文閣出版, 2001
- 12 大久保遼「明治期の幻燈会における知覚統御の技法 — 教育幻燈会と日清戦争幻燈会の空間と観客 —」日本映像学会編『映像学』通巻83号, p. 8, 2009

なお、本研究は2014年度・2015年度 DNP 文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成および JSPS 科研費15K16645の助成を受けたものです。

